

大学生の語りにみられる否定的な過去体験の認知的再構成

～契機としての自己と他者のダイナミクスに着目して～

山田 剛史

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

【問題と目的】 筆者は大学生の自己形成という発達現象を捉えることを出発点(帰着点)として研究を行っているが、山田(2003a, 2003b, 2003c)における一連の研究では、大学生の“日常的活動とそれに付与される肯定的意味づけ”としての自己形成に関する質・量的検討を行った。本研究では、大学生に自己の成長体験について、時間軸を大学生生活内から拡張してこれまでの全生活史内から想起し語ってもらった。“語り”という“個”が浮き彫りになるボトムアップ的アプローチを用いることにより、現時点における当時の可能な限り詳細な感情や認知およびその体験の意味のダイナミクスについて汲み取ることが可能となる。本研究では、自己形成を“否定的な過去体験の認識内における肯定的方向への再構成”として捉えたときに、その契機としての自己のゆらぎと他者の存在や働きかけがいかに機能しているかに関する検討を行った。

【方法】 対象者: 近畿圏内の私立大学の2・3回生30名(2回生男子6名, 女子14名; 3回生女子10名)のうち、特に否定的体験が肯定的な体験として再解釈されその契機について語られた3事例(男子1名, 女子2名)を対象とした。**調査時期:** 2003年7月30日～8月7日。**手続き:** 大学の一小教室にて1対1の対面法による面接を行い、その内容は対象者の承諾を得た上で、MDに録音された。**質問内容:** これまでの人生を振り返ってみて、こういう体験や経験は自分にとって良かった、成長させられた、これで自分は変わったといったことについて自由に語ってもらった。それに対し、その体験がいつ頃のことなのか、その体験を通じてどのようなことが得られたのか、そうした否定的体験が肯定的なものとして捉えなおされた契機についての質問を加えた。

【結果と考察】 表1より、個人における過去の当初否定的に意味づけられていた体験が肯定的な体験へと移行するときの契機としての自己と他者のダイナミクスに着目すると、それらの移行は自己の側の「対象化(自己への問いかけ)」や「(部分的にであれ)肯定的感情」、他者からの「働きかけ(声かけ)」や他者との「相互作用」のいずれもが非線形的に絡み合った結果生じるものであるということが示唆された。

表1 否定的過去体験から肯定的認識への変容を促すものとしての契機

	2回生/20歳/女性	3回生/21歳/女性	2回生/19歳/男性
体験(時期)	部活(高校)	接客のアルバイト(大学→)	家が神社であること(ずっと→)
当時の感情	いやでいやでやめたかった…先生もすごく怖くて色んな事された	最初はすごいイラついてた…割り切れないですね、もうかあ…ってなって	ただ単に自分の環境がだるいから抜け出したい…結構ほんとに辛いもんであった
得たこと	ああゆうの全部たえてやったことはおっきいって思います…途中で投げ出したりすることは、嫌な人になりました…投げ出さないようになったのは自分にとっておっきい…あと簡単に諦めたくないとか	ほんまに色んな事を学びましたね…今はこの人はこういう人なんだって割り切ることで、自分の心の負担がだいぶ減りました…今は気にしてないからしんどくないんですね	色んな知識が増えたり、それによって自分の性格というか、その個人的な考え方や色んな考え方が出来るようになったというのが、今までの人生において大きいかなと
契機(自己)	やった後の達成感とかはあった	(お客さんがありがとって)何で言ってくれへんのかなあ	1人になって考えることが多かった…信頼されることへの嬉しさ
契機(他者)	1回やめたって先生に言ったら、これからの人生は辛いことが毎日毎日サイクルでくねんから、どこに行っても逃げられへんで、みたいなこと言われて…そうや、逃げ出したらあかんって思われて、それからだったんで	接しているうちに、ふっと気づいたんですよ…あたしがお客さんにありがとって言って欲しかったら、こっちがそういう態度で臨まないと無理やと思ったんですよ…考え方を変えたんですよ	知り合いにも同じようなお兄さんいるんですよ…そのお兄さんが独立した時に話を聞いた時に、そういうことを思う時期はあると…でもそれが最終的にプラスになるかマイナスになるかはその時の自分の考え次第で全てが変わるって言われた時に、もいっかい考え直してみようって思っってこういう結論が出たんですよ

(YAMADA, Tsuyoshi)